

万葉ベビーカー行脚

―子育てからみたまち空間・高岡とその周辺―

藪谷 智恵

CHIE YABUTANI

インスタレーションという、場所や空間全体を体験させる芸術表現があるけれど、親になることは、子どもがいるというインスタレーションのなかにずっといることみたいだ、と思う。子どもは、世界の受容のしかたを変えるし、世界そのものも変える。子どもがいるということは、時にかかるやかにユーモラスに、時に重々しく深刻に、一人でいた時とは違う身体、違う空間を、つねに引き連れているような感覚がある。

私は妊娠出産という身体の大きな変化を体験して、また子どもが存在として外に出てきたことで、気づくこと、重視することが変わった。子どもは、圧倒的に小さくて弱い存在だから、まず子どもを守ることを一番に考えるようになった。それから、子どもが喜ぶことが何よりも嬉しいから、子どもを喜ばせること、子どもを笑わせることを考えるようになった。子どもにとってこれほどという意味があつて、こういう面白さがあるか、子ども

もを通じてのものの方が内面化されて、それはこれからどんどん進んでいきそうだし、自分の幼い頃を追体験していくだろう予感もある。

子どもがいると、世界の側も、それまでとは違う顔を見せる。歩く道が、お店が、電車の中が、まちが、大人だけにいるのとは違う場に変容する。

■知らない土地で初めての子育て

私の高岡での暮らしは、初めての子育てと同時にほじまった。

夫婦ともに実家から遠く離れた、親戚も友人もない、訪れたことすらない土地に、夫の仕事の関係で住みはじめたのは、半年前のことだった。地元の産院で里帰り出産をした私は、花曇りの肌寒い春のある日、月齢一ヶ月の娘と二人、先に新生活をはじめていた夫に合流した。

当初私は、土地勘のない場所での生活に不安を覚え、焦っていた。

大人になれば、自分にとって心地よいコミュニティのなかだけでも生きていける。私はいくつかの土地で暮らした経験から、大人だけであればいかようにもやっていける自負があつた。どこの場所にも価値観の近い人はいて、行きたい場所、興味のある催しに出掛けて行けば、自然と知り合い、友人はできていく。時間はかかっても、のらりくらりやっていけばそのうち慣れる。最悪慣れなくても生きていける。買い物はネットでできるし、必要があれば都内でもどこでも必要が満たされる場所へ行けばいい。けれど子どもはそうはいかない。大人と子どもでは、住んでいる土地から受ける影響の大きさも移動の負荷もまるで違う。私自身も出掛けるのは基本的に子どもにとつて負担にならない場所へ、負担にならないスケジュールでとる一方で、土地に慣れること、地域を把握することは、とても急を要することに思われた。

まず予防接種のスケジュールをこなしていくこと、そして何か病気をしたときのために、信頼できる小児科を見つけておかないといけない。保育園の申し込みまでに、市内にいくつもある保育園の場所や雰囲気把握し

たい。状況によっては、引越もふくめて検討する必要がある。出てくるかもしれない。のびのびと走り回れる公園や休日に遊びに行ける場所、どこが子育て世代に人気のエリアなのか、治安の悪い場所というのはあるのか、ないのか、そういうことも知りたい。

親戚や友人がいらないというのは単純に頼る人がいないというだけでなく、とにかく、土地のことがわからないのだ。ある程度の期間住んでいけば自然と持てるはずの、あのあたりはああいう感じ、このあたりはこういう感じという、肌感覚がない。その圧倒的な情報のなさ、蓄積のなさ。とはいえ、ないものはないのだから仕方がない。私はとにかく出掛けて、身をもって体感しながら、街について知ろうと思った。自分のなかに立体的な地図を描くのだ。こうしてベビーカーを押しながら、街中を歩く日々がはじまった。

■街に流れてきた時間、古い場所と新しい場所

私たち家族が住んでいるのは古久という、高岡の中でも海に近い、庄川と小矢部川に囲まれた中州のような場所だ。水運に恵まれた立地から江戸時代には加賀藩の米蔵がおかれ、明治時代には米穀問屋が軒を連ねたそう

で、伝統的な格子戸をもつ木造建築が並ぶ大通りは、たしかに違う時代に来たような感覚を抱かせた。同時に、水運の利は工場の立地条件としても適しているから、小矢部川沿いは工場が立ち並び工業地帯でもあって、吉久は工場に囲まれた伝統的建造物ののこる街という、なんとも不思議な景観を持っている。

高岡は古代から現代まで、さまざまな時代の要素が層をなして感じられる、いわゆる歴史のある街だ。まず、加賀の前田家二代目当主、前田利長が築いた城下町としての空気が色濃い。まちなか、と呼ばれる中心市街地には当時のままの町割、町名がのこり、中心にある古城公園も、伝統工芸や、国宝に指定されている瑞龍寺も、長いゆかりのものだ。

駅北側には、江戸時代の町割がのこる「まちなか」があり、その外側には拡大されていった市街地に住宅街が続き、海の近くにはまた歴史ある街並と工場群が混然と、けれど静かに佇んでいて、それらをゆつくりと走る路面電車が繋いでいる。さらに、吉久とは小矢部川を挟んで反対側、能登半島のつけねに連なる伏木は、奈良時代に大友家持が国守として派遣されていた場所で、万葉集に収録されている彼の和歌の約半数がそこで詠まれたこと

から、高岡は万葉のふるさととも呼ばれている。

一方駅の南側は新しく開発された地域で、新幹線の停車する新高岡駅周辺にはショッピングモールと、芝生広場にじゃぶじゃぶ池のある大きな公園があり、宅地化が進んでいる。

私はベビーカーに娘を乗せて、ある時は市役所へ手続きに向き、ある時は予防接種に出掛け、またある時は子育て支援センターへ、図書館へ、高岡大仏へ、古城公園へ、伝統的建造物保存地区のカフェへ、雑貨屋へ、保育園の見学へ、ショッピングモールへ、芝生広場のある公園へと出掛けた。

そして気づいたのは、あらゆる空間は子どもが過ごす前提で作られている場所と、そうでない場所の二つに分けら



写真1：高岡大仏の前で



写真2：近所の路地にて。トタンとガルバリウムが特徴的な高岡の家並みが、はじめは重々しくて苦手だった

れるということだった。

■あらゆる空間は二つに分けられる。子どももありきか、そうではないか。

高岡において、昔からある場所と新しい場所は、ほとんどそのまま、子どもを前提としている場所とそうでない場所に分けられるようだった。

私は基本的には、世界中がどこも似た景色になっていく流れには抗いたいと思っている。その土地ならではの食べ物、工芸、建築その他文化をみていきたいし、それらをのこしていくための一端を担いたいと思って、二十代は伝統工芸の布の産地で働いた。ショッピングモールは価値観としてはある意味でその対極にある。それが出産後、モールに行く頻度が激増した。どうしてモールが人で賑わっているのか、やっとわかった。

理由はとても単純なことなのだが、ショッピングモールはそもそもが、子ども連れで出掛ける場所として作られているのだ。

子育てにおける子ども用品の買い物というのは、哺乳瓶にベビーカーにチャイルドシートに抱っこ紐に寝具に服におもちゃに絵本に衛生用品に離乳食関連用品にプレイ

マットに安全対策グッズに防寒グッズにと、調査検討も含めるとけっこうな量のある作業で、産前に準備しておくものはもちろん、産後も子どもの成長にに応じて適切に追われるように揃えるべきものが出てくるのだけど、まず子ども用品の専門店がモールにあつて、それらはほとんどセットだといえる。そして施設内にはオムツ替え専用スペースがあり、授乳室がある。どこで授乳するか、というのは乳飲み子を抱えた外出では常に気に留めておくべきことで、授乳室があることはそれだけで、その場所に行く理由になる。さらにモール内では、ベビーカーを出したり畳んだり、抱っこ紐やチャイルドシートに入れたり出したり、室内外の気温に合わせて服を着せたり脱がせたりしなくてよく、そのため子どもがせつかく寝たのに起きてしまう、というような事態にもなりにくく、ストレスが少ない。雨風の心配もしなくていい、車の危険もない、ベビーカーで楽に移動できるフロアの中に、子ども用品店があれば、食料品の売場も、日用品の売場も、服屋も、子どもが泣いても気兼ねしないでいられるフードコートも、あまつさえ子どもの遊び場まであるというモールはほんとうに便利で、食べる、移動する、排泄する、着替える、といった生活における基本動作に大

人の何倍も手間のかかる育児において、便利さの価値はほんとうに高い。

そして、そうしたモールの周りの住宅街は、歩道が広く、車道としっかり分けられている。所々に公園が整備され、植栽はきちんと手入れがされていて、見通しがいい。

一方で古くからのまちなかには、子ども用品のお店はないし、子どもを意識した公園もない。古城公園はとも立派なお堀に囲まれていて、落ちたら溺れると考えるのは心配すぎとしても、入り口から公園内部まで距離があつて、子どもが安心して遊べるつくりにはなっていない。園内の木々は立派だけれど鬱蒼としていて、死角も多い。砂利道はベビーカーに不向きだし、一周ぐるりとまわろうとしても、階段部分があつて阻まれる。つまり乳幼児のための公園ではない。江戸時代の町割に、子どものための公園はないのだ。古い建物をリノベーションしたカフェは気分転換には嬉しいけれど、そこで過ごしている人の多くは日常を離れた落ち着いた時間を過



写真3：万葉線の車内から

ごしたいと思っっているわけで、もし子どもが泣いたらそのくつろぎを邪魔してしまうと思うと落ち着かない。歩道のない道も多く、あつても段差が急だったり、傾斜していてベビーカーを押すのに物凄く苦労させられたりする。

賑わっているのは、明らかに、ショッピングモールであり、見通しの良い整備された公園だった。吉久の通りはただただ静かで、高岡駅北口から続く商店街は立派なアーケードがむしろ寂しさを助長するほど人がまばらで、シャッターの閉まった店もあり、路面電車は絶対に座れる。いったい人はどこにいるんだろうと思つてモールに行くとき、そこにはいくつもの人だけがあつて、そ



写真4：駅に続くアーケード商店街



写真5：吉久と伏木を結ぶ橋の上から

の近くの公園の水遊び広場は混んでいるほどだった。同じ高岡という都市にいながら、世界は二つあるみたいだった。子どものいる親は、その場が発しているメッセージを敏感に読み取る。安全で安心で便利ということの価値は、子どもがいるとぐんと高まる。子育て世代が子どものことを意識してつくられている場に行くのは、中心市街地の空洞化、高齢化という問題をどう考えるかは別のこととして、至極当然のことに感じられた。けれど私は、子どもと一緒に、子どものために作られた場所以外にも、行きたい。

■踏み出すごとに徳が積まれるような

私に、私が感じている以上の子どもの価値を教えてください。私に、高岡の、昔からあるほうの街の人たちだった。吉久の、歩道がないのはもちろん車がすれ違うこともできない細い道を散歩していると、必ず「赤ちゃんかわいいね」と声をかけられた。すれ違う人は足をとめ、庭先で作業していたり玄関先で井戸端会議をしている人は「赤ちゃんみせて〜」と通りまで出て来て、ベビーカーの中の娘をみて、「かわいいかわいい」と言った。何度も会う人もいれば、一度きりの人もいた。ただどんなおばさ

ん、おばあさんも、ベビーカーに吸い寄せられてくるようだった。

万葉線では、運転手さんが私たちを優先席に案内してくれ、降りる駅を気にかけて、ベビーカーの乗り降りを手伝ってくれた。娘を一生懸命にあやしてくれる人もいた。駅北口の郵便局では、窓口の人が「赤ちゃんみせて」とカウンターのなかから出て来て、私の後ろに並んでいたお客さんと一緒に、娘のことを愛でてくれた。信号待ちをすれば、隣り合わせたおばあさんが娘の笑顔をとて喜んでくれた。ベビーカーを畳むのを手伝ってくれたおばあさんは、何度も何度も、子どもは宝だから、宝だからと、可愛い子を拝ませてくれてありがとう、ありがとうと感謝してくれた。

娘をベビーカーに乗せて静かな高岡の街を歩く私は、だんだん、自分が運んでいるのは、私の娘という以上の、ほんとうに大事で貴重な、光を発する存在であるような気がしてきた。娘を連れて歩いているだけで、なんだかとても良いことをしている気がするのだ。一歩踏み出すごとに、徳が積まれていく、何かの修行をしていると錯覚しそうだった。

子宝という言葉があるけれど、きっと子どもというの

は、本当に、宝なのだ。仏様でもお地藏様でもない、ただの子どもが、人全体にとつて、嬉しい、かわいい存在なのだ。

赤ちゃんを巡るやりとりは、どこであつても、多かれ少なかれ生まれるものだとは思ふ。娘を抱いて、東京都内を通過する混んだ電車に乗ったときにも、娘をあやしめてくれる人、笑顔を向けてくれる人はいた。シヨッピン

グモールの中でも、話しかけてくれる人はいた。けれどもやっぱり、私が特別な感慨を抱くほどの言葉を向けられたのは、人と人との距離が近い、古い街だからこそだつたと思う。道行く人と挨拶をし合うのが基本であるような、人と人が繋がっていることが前提であるような場所。

今の日本は、子育てがとても大変なものになっている。昨日も電車内での赤ちゃんの泣き声に暴言を吐かれたお母さんを巡る議論がニュースになっていた。電車に響く赤ちゃんの泣き声は迷惑、という意見と、働かねばならない母は赤ちゃんを背負つて電車に乗らざるを得ない、仕方がない、という意見が交わされていたけれど、いずれにしても、赤ちゃん存在がお荷物になつてしまふ環境が、かなしい、と思う。

■子どもがいる世界

子どもがいると、世界が優しくなつて、特別なことが起きる。それを強く実感したのは、地元から遊びに来た友人家族を案内して、近隣観光に出掛けたときのことだつた。

赤ちゃん二人、幼児一人、大人四人の旅。歴史ある街の散歩と立山連邦の景色を楽しんだ翌日、私たちは雨晴海岸へ出掛けた。高岡というと城下町、古い街並のイメージが強いけれど、実はとても海が近くて、まちなかから車で二十分もあれば海岸に出ることが出来る。そしてその雨晴海岸はほんとうに美しい。

私と友人の地元、藤沢は、片瀬海岸に江ノ島のある湘南地方で、海と、海がつくりだす海辺の空気感が名物の場所だ。南向きの海は明るくて、いつも賑わつていて、それでいてゆったりとした時間が流れていて、とても居心地がいい。

けれども北向きの海もいいものだ。快晴の雨晴海岸を訪れて、心からそう思った。光を反射しすぎない海は、晴れていても青い色がきれいによく見える。そして、景観の美しさに対して、人が少ないのがいい。道路は渋滞していないし、余計な建物もなければ看板もない。プラ

私は万葉線の降り口付近に座つていて、降りて行く人に

そのつど、何人もの人に入れ替わり立ち替わり、「赤ちゃんかわいいね」と言われ続けたことがある。暴言を吐かれたお母さん、三十分だけでもいいから、こ

こに来て一緒にこの電車に乗れたらいいと思った。育児に行き詰まつたら、自分のやつていることの価値が見えなくなつたら、ここに来て、三十分でもベビーカーを押して歩けばいいのに、と思った。

歩いているだけで喜んでもらえて、こちらも嬉しく、相手も嬉しいのがまた嬉しい、嬉しさが続いていく。子どもは宝で、子育ては尊い仕事なのだ。この気づきは、子どものための場所、同質性の高い集まりの中では、たぶん得られない埋もれてしまうもので、でもとても大事な、ほんとうのことだ。



写真6：お散歩中、近所のおばあさんの手を握らせてもらう娘

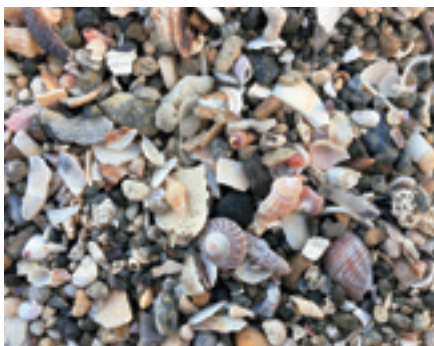


写真7：雨晴海岸の貝たち。ほんとうに小さくて、けれど精巧なつくりをしているのが赤ちゃんと似ている



写真8：大人の高い目線では気づかなかつたらう、貝に気づいた瞬間

イペートビーチ、といったら大袈裟だけれど、それに近い感がある。もちろん観光の人はいるのでけれど、人の多さにうんざりすることが全くない。

渚の手前でじつとうずくまる友人の子どもがみつけたのは、目を凝らさないと気づかないほど小さな貝だった。雨晴の浜を構成しているのは、小指の爪よりも小さい貝だったのだ。富山湾の、日本の魚種の過半数が獲れるという海の豊かさに興奮して、私たちはしばしば貝拾いに没頭した。

昼食後も海辺観光を満喫した後で、今度は山に行くう、と高岡と氷見にまたがる山間沿いのカフェに行くことになった。カフェの窓からみえた家々がとてもきれいだったから、私たちはその山に囲まれた集落を散歩することにした。ずっと忘れないだろう、心が揺さぶられる出来事があったのはそのときだった。

山からおりてきた夕方の空気は、とても良い匂いがした。どこかの家でおでんを煮ているような、美味しそうな出汁の匂いも漂っていた。それから、金木犀。庭先には柿の木、紫色の菊。里の秋を堪能しながら歩くと、ちょうど背景に山並みが広がる開けた場所に出て、私たちはそこで記念撮影をすることにした。セルフタイマーを押

して、ポーズをとって、ぱちり。その後も映りを確認したり、道を調べたり、しばらくその場に留まっていると、「どこのうちの子？」と、小さなおばあさんに声をかけられた。観光地ではない集落を、こうして家族連れで歩いているのは珍しいのだろう。私が高岡に住んでいること、友人が地元から遊びにきたので近隣を観光していることなど伝えていると、友達の子どもが揃って手に持っていた昼咲月見草を、ふっとそのおばあさんに差し出した。

おばあさんはとても喜んで、朝晩二回、仏様の祠に毎日手をあわせにいくそのときに、このお花もお供えするよ、と、このあたりの方言のある言葉で、それはそれは嬉しそうに話してくれた。

私は、どこから来たのか聞かれた時に、警戒されているのかと一瞬考えてしまった自分を恥じた。知らない顔だから、ただ単純に声をかけたのだ。こういう声かけ、地域の目が、子どもを見守ってくれるのだろう、と思っ

た。ぐるりと畑の中を歩き、車を停めてきたカフェに続く広い道路まで出ると、今度は大きな柿の木のある家のおばあさんに、「どこの家に遊びにきたの？」と声をかけ

られた。ただ家族連れが散歩していること、それが珍しいのだと思った。再び同じ説明をすると、今度は「柿をもつていかれ」と、おばあさんは高枝切り鋏を持ち出して、ポキンポキンと実のついた枝を取り始めた。

柿はどんどんと集められ、いつのまにかおばあさんが用意してくれたビニール袋いっぱいになっていった。私たちは突然の柿狩りの機会を喜んで、おばあさんとの出会いを喜んで、また車に戻ろうとして歩き出した。日はだいぶ落ち始めて、空の色はうす赤く染まって、街灯の明かりが目につき始めていた。寒くなる前に戻ろう、と足を早めたとき、見覚えのある人が自転車で通りかかって、私たちの前で停まった。さっき、記念撮影をしたときに話したおばあさんだった。

「仏様にお供えするよ」
自転車のカゴにまだ昼咲月見草をいれたままのおばあさんは、そのカゴから、赤ちゃんも食べられるおせんべいの袋を取り出して、友人の子どもにすつと渡した。お花の御礼にあげようと思って、私たちのことを自転車で探していたらしい。柿狩りをさせてもらったことを話すと、「柿のある家は、キヨちゃんちかねえ」と、小さい子どもが仲の良い子のことを話すために、ほんとうに屈

託のない笑顔で笑うのだった。

おばあさんと別れてから、どれくらいの間探していたんだろう。わざわざ家に帰って、自転車に乗ってきてくれた、探してくれたと思うと胸がいっぱいになった。昼咲月見草が、おばあさんを掻き立てたんだと思った。きれいなものをすつと差し出せる子どもの感性和、それをほんとうに嬉しく感じてくれるおばあさんの感性が響きあつて、とてもとても美しいもの、きらきらと光るものが、その時のその場所に現われていた。山間の集落と、私たちと、おばあさん、それぞれの世界が、子どものさりげない、でも子どもだからこそできる行為で、ひとつに重なった。人と人が繋がること、それがこんなに心を揺さぶるなんて知らなかった。子どもがいる世界はなんて豊かなんだろう。

この出来事のおかげで、この日みた景色の美しさも、いつそう光を増すように感じられた。山からあがる水蒸気、畑からあがる焚き火の煙、緑濃く重なる稜線。貝で埋め尽くされた砂浜、深い青の水平線。そしてそれらに擁されている高岡という街が、奥ゆきをもって、立体的に感じられた。

ずっと昔からの営みが色濃くのこっている場所と、新しくつくられた場所と、海と、山があるところ。そこで人が暮らしているところ。この自然の地形のある土地だから越中国府がおかれ、前田利長も城を築いたに違いない。歴史の縦軸の奥ゆきと、自然環境の横軸の広がり、それが交わる場所。ここで子どもを育てていくことは、とても良いことなんじゃないか。

■まだ見ぬ出会い、まだ見ぬ子育て

遠くに近くに聞こえてくる太鼓の音で目が覚めた。夢の中でも鳴っていたお囃子の音。起き上がると、やっぱり太鼓の音がしている。そういえば今日は吉久の秋祭りだった、とぼんやり考えていると、ガラガラ玄閤が開いて、法被を着た人が「もうすぐ獅子舞がきます」と言った。

慌てて着替えて、娘を抱いて表に出る。隣の家の玄閥の前で、お化粧をしてきれいな着物を着た子どもが、獅子舞の前で躍っている。白く縫った頬に赤い丸のお化粧。水色の鉢巻きに、ピンク、赤、紫、蛍光緑の花笠、派手な橙色の着物。小学生くらいだろうか、一生懸命跳ねている。私は獅子舞のことは全然目に入らず、お囃子の

車や笛や太鼓の人だかりの向こうにいるその子ばかり見ている。大切な役割を負わされているだろう子どもは、なんとも言えない空気をまとっていて、目が離せなかった。こちら側と向こう側を繋ぐのはやっぱり子どもなんだ、と思った。

これまで全く知らなかったけれど、富山は日本でも有数の獅子舞行事がのこる、獅子舞県であるらしい。その日に出掛けた帰り道、いつもは人が住んでいるのか不安になるくらい静かな通りの家の窓が開け放たれて、大きな人だかりができていのに遭遇した。これから獅子舞がきて家の中で舞うらしい、それを皆待っているのだという。

高い声がして見上げると、肩車された子どもだった。隣にいる女の人は抱っこ紐で赤ちゃんを抱いて、さらに腰ほどの背丈の子どもと手を繋いでいる。見回すと肩車された子どもは何人もいて、路地から、家々から、手を引かれたり連れ立ったり、子どもと、彼らの親だろう若い男女が続々と出て来ていた。驚いたことに、人だかりは若者と子どもでできていて、到着した獅子舞を囲むお囃子の人たち、神輿をかつぐ人たちもまた、若者と子ども達だった。



写真10：夜の獅子舞

観光で来ている人はいない。誰もがちよつとそこまです、といういでたちでいた。誰かにみせるためではない、ただ土地の人のために続いていたこと、という空気だった。見世物として集客しようとかPRしようとかの意識のない、素朴な、けれど他の多くの場所では失われてしまった、土地や自然と人が結びついている空気が、なにももつたいぶらず、大袈裟にせず、当たり前のもものようにぼんと差し出されていて、それを担っているのは若者で、気負いもなく、ただ楽しそうだった。昔からある場所と新しい場所、おじいさんおばあさんと、若者、子ども達がいる場所の組み合わせ。私がこれまで高岡でみってきた景色と、その日みた景色は全く異質だった。

私はやっぱりまだ、この土地のことを全然知らない。まだ見ぬ出会いと、ここだからこそできる子育てがあるはずで、それがどういうものになるのか、今はただ楽しみにしている。

お囃子はその日の夜遅くまでずっと、遠くに近くに、鳴り響いていた。